


特定非営利活動法人 日本免疫学会  
 平成 30 年度 前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award  
 研究発表報告書

申請者氏名	西井 直人	会員番号	0034621	
申請者の所属・職名	東京医科歯科大学 分子免疫学分野			
出席会議名	15th International Symposium on Dendritic Cells			
発表論文タイトル	Systemic administration of a TLR7 agonist attenuates regulatory T cells by dendritic cell modification and overcomes resistance to PD-L1 blockade therapy			

実施結果:

この度は、平成 30 年度前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award に選出していただき、誠に有難うございました。私は、ドイツのアーヘンで開催された International Symposium on Dendritic Cells (2018 年 6 月 10 日～14 日)に参加し、上記演題でポスター発表を行って参りました。

私は、癌免疫療法の一つである免疫チェックポイント阻害療法の効果をさらに高める手段として、併用療法の研究を行ってまいりました。樹状細胞の活性化を促す TLR7 アゴニストの全身投与が併用剤として非常に効果的であることを見出し、そのメカニズムには形質細胞様樹状細胞 (pDC) と古典的樹状細胞 (cDC) の相互作用が深くかかわっていることが推察されました。樹状細胞の機能や臨床応用について最新の知見を知りたいと思い、また私の研究を樹状細胞の専門家が集まる学会で発表してみたいと思い、この学会への参加を決めました。

本学会はその名の通り樹状細胞に焦点が置かれており、樹状細胞の分化やそれに関わる転写因子、新たな分類などについての基礎研究や、樹状細胞ワクチン療法など臨床応用についての研究が発表されていました。会場はこじんまりとしていて質問しやすい雰囲気があり、しばしば起こる白熱した議論に初めは圧倒されてしまいました。樹状細胞の分類と機能について焦点を当て、それがあある疾患や免疫応答にどのように関わっているか、という展開をした演題が多く、癌免疫療法について研究し、メカニズムを掘り下げる中で樹状細胞にいきついた私の研究とは展開の仕方が異なり、新たな研究の考え方を知ることができました。また、樹状細胞の分化、機能といった基礎研究を掘り下げるグループと、それを生かしてどの樹状細胞を使えばワクチン療法がうまくいくかといった臨床応用を掘り下げるグループがあり、この学会を通してその基礎と臨床の結びつきがさらに強まっている印象を受け感動しました。まだまだ分かっていないことも多く、現在わかっている分類や機能を土台として、今後それらはさらに変化していこうという実感も、常に情報をアップデートする必要性を感じました。ポスターセッションでは、多くの方々が私のポスターを見に来てくださり、ディスカッションを通じて新たな視点をいただくことができました。一方で、議論が白熱するとそのテンポになかなかついていけず、歯がゆい思いをしたので、より英語でのコミュニケーションスキルを磨かなければならないと痛感しました。

4 日間、樹状細胞についての濃厚な議論を英語で聞き続け、またディスカッションをすることで、樹状細胞について多くの知識、考え方をいただくことができました。何より国際学会の雰囲気を肌で感じ、英語でのディスカッションの楽しさと難しさを実感することができたことは非常に有意義でありました。今後どのような研究をしていくか、どうやって英語力を磨くかで頭がいっぱいになっております。この貴重な経験を生かして研究を進展させ、その成果を是非また国際学会で発表できるよう精進していく所存です。

最後に私をこの栄誉ある賞に選んでいただき、DC symposium への参加の機会をくださった岸本忠三先生、選考委員の方々、ならびに推薦してくださいました東みゆき先生にこの場を借りてお礼を申し上げます。